



TITLE:

# <學界展望>北アジア遊牧民族史研究の一視點

AUTHOR(S):

原山, 煌

---

CITATION:

原山, 煌. <學界展望>北アジア遊牧民族史研究の一視點. 東洋史研究  
1971, 30(2-3): 262-269

ISSUE DATE:

1971-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152838>

RIGHT:

## 學界展望

## 北アジア遊牧民族史研究の一視點について

原山 煌

北アジアの遊牧民族の歴史を研究しようとする者が不斷に直面せざるをえなかった最大の問題の一つは、おそらくは史料の決定的な寡少という點にあつたであらう。その爲、當該地域に關する何ほどか「實證的」な考究を試る際には、手續き上の問題として周遊の「先進文化圈」の殘した、いわば外からの記録を基礎とすることがとりあえず要求されたのである。しかし乍ら、それらの史料には信憑性や視點（問題意識といつてもよからう）において大幅なバラツキが存在することから、無原則的にそれらを受容してしまうことには大きな危険が潜んでいた。

それ故、最初の段階として、それら相互の間に生起する各種の矛盾撞着を解きほぐし整理することが、最も重要な作業として認識され、それは具體的には多くのすぐれた歴史地理的「比定論」や、特定の遊牧國家の動向・治績を扱った論考として結實をみたのである。そしてその次の段階として、それら先達の業績をふまえて「遊牧國家」なるものの構造と、その構築の過程に關する考察が歷史上その強盛を以て知られた遊牧民族の場合について行なわれ、そこで権力機構と支配のありようのかなり明確な把握が可能となつた。

しかし、それらの研究のうちのかなりの部分は、そのあらゆる長所にも拘らず、多かれ少なかれ「遊牧國家」の上部構造を視野の中心に置いた考察であることを脱しえず、ともすれば該社會の基層部分との關わりという問題を缺落した形で行なわれたことは否定できない。そしてそのことが、北アジア遊牧社會についての研究動向を語る際に、慣用句の如く現われる「研究上の沈滞」という言葉で表現される狀況を生み出した大きな原因の一つであつたといえるのではない。事實、この課題の解決がなされぬ限り、遊牧社會の發展の法則についての生産的な理論を樹立し、他の形態の社會のそれとの對比を行ない、そのことを通じて眞に有意義な論争を行なうことは不可能であらう。

ところで、このような傾向が批判され、諸種の問題提起がなされたのは、とりたてて言うほど最近のことではなかつた。その一例としては、山田信夫氏が「遊牧國家論批判」（『歴史學研究』・二二二號、一九五七年）において論じたものがある。同氏は、遊牧國家論における氏族（或は氏族制）や部族（或は部族制）などという概念が、明確な規定に基づいて使分けられているものではなく、むしろすぐれて便宜的に各時代の性格を表わすものとして安易に用いられていたとされ、その傾向をば遊牧國家論の最大の限界と論斷された。そしてこの弊を克服して研究上新たな進展をもたらす爲には「基本的社會集團の分析、そのなかの階級、できれば家畜所有の問題を明らかにすることが肝要であり、とくに後世に關しては、いわゆる氏族制遺制を判別せねばなるまい」という問題の核心をついた主張をなされたのである。この問題提起は、十數年を経た今日において殆どそのまま當嵌まるものであり、この種の立場よりなされた

研究の絶対量の貧弱さは、直ちにその方法上の多大の困難さを示すものであるといえよう。

小稿においては、このような限界を克服するのにある程度資するところがあるのではないかと思われる一つのアプローチに焦点を合わせ、それに關する最近の成果を挙げようとするものである。それは歴史學の周邊諸科學の効果的かつ正しい吸収——換言すれば、批判的な問題意識をふまえた論理的な方法による——と、それとの有機的な關わりの上に立つた研究である。周邊諸科學とはいっても、その内容は考古學・言語學・人類學・民族學など多岐にわたるが、考古學的成果については、それが直ちに最も正確な證據物件としてその存在を主張しうる性格のものであり、極めて強固な影響力を歴史學に及ぼすものと一般に認められているし、言語學的知見に基づいた各種の歴史學的考察は、特に遊牧民族の歴史については、その最初の段階から重要な研究手段として認識され、實際に多くの定説を產出した實績をもっている。

また人類學の立場からする遊牧社會の分析も、獨自の地歩を築きあげたことによつて、遊牧民族研究に見逃しえない多くの資料を提供した<sup>①</sup>。しかし民族學や民俗學との効果的な協力關係に立つた研究は、その立場の設定の困難さをはじめとする幾つかの問題もあって、新たな展望を示す進取的なものを多く産みだすというわけにはいかなかった。その主な原因の一つとしては、兩者の間の關わりが一種の曖昧さということがあげられるのではないだろうか。それ故小稿においては、歴史學と民族學・民俗學の關わりという問題についての見解の幾つかを紹介し、併せて若干の資料をもあげたいと思う。

この問題については、どちらかといえば、歴史學以外の分野から歴史學に對してなされたコメントが目立つといえよう。我國で行なわれたこの種の發言のおそらくは最初の重要なものは、柳田國男氏が一九三一年に民俗學的立場からなされたそれであろう。柳田氏は「國史と民俗學」という記念すべき論文において、「彼らは我々の記憶經驗を目して齊東野人の語だの蕪蕪の言だのと輕しめて置きながら、自分の都合のよい時のみは、以て史學の闕を補ふべしなどと無造作にたつた一つの口碑を採用して居る」と、歴史學者の無原則的な民俗學的資料の濫用に鋭い警告を發したのである。これは當時、日本民俗學の確立に心血を注いでおられた同氏が、民俗學と歴史學の關わりが、その一方の心ない扱いによつてお互いを貶しめ、卑しめる結果に陥る事態を憂慮しての指摘に相違あるまいが、その心痛を杞憂たらしめるべく常に努力することは、全ての研究者が當然果すべき任務であるといえはしまいか。事實、柳田氏もその論文において民俗學の爲すべき廣汎な役割について、その期待しうる効用と共に説いておられる。

最近大林太良氏によつて譯出されたソコロウワの論文<sup>②</sup>(V. Sokolova, La poésie populaire orale comme source historique et ethnographique; in VI<sup>e</sup> Congrès International de Sciences Anthropologiques et Ethnologiques 1960, Paris, Tome II, Paris, 1964. —「歴史と民族學の資料としての口誦民謡」、『北アフリカ民族學論集』・第三集、一九六六年)を見れば、この問題への更にプロGRESSIVEな對處の必要性と正當性を主張していることが理解できる。彼は「民族の如何を問わず、口誦民謡の諸作品は、その住民の經濟的活動や主な生業についての概念を與えてくれる。つまり研

究対象たる民族や、一群の親縁諸民族に固有の諸特性を全くはつきり示してくれる」と述べ、「歴史的文献記録のさまざまな種類が存在している時は、民謡が史實的な情報資料としては役立ち得ないことはもちろんである」と言いつつも、「口誦詩は純粹に歴史的な資料としても、ことに、かつて文盲だった諸民族の歴史を研究するときに大きい價值をもっている」と言い、更に「それ故、ソ連邦の諸民族の歴史を書く場合、民間傳承によつて與えられた諸資料も大幅に利用するのは當然のことである」と明言している。もちろん、彼がこの主張をなす際に「民間傳承研究者」、「民族誌家」および「歴史家」の夫々の、持ち分を確實にふまえた緊密な聯繫を要求し、極めて慎重かつ批判的な前提を設けている點も見逃されてはならない。これをして、前記柳田氏の問いかけに對する一つの最も誠實な態度表明と讀みかえても大過ないものと考えてよいのではなからうか。

考えるに、歴史學とその周邊諸科學との關連が問題にされる場合、常に中心的な論争點の一つとなつてきたのは、「文献記録」と、それら諸科學の產出する成果との關係であり、また歴史學の依據すべき最も重要な前提たる「時間」の處遇であつた。前者については、先に述べた柳田氏の論文においても正鵠を射た見解が示されているが、他方については、故石田英一郎氏と岩村忍氏の意見の應酬が今以て最も印象に残るものといえよう。論争は、岩村氏が石田氏の「桑原考」(『民族學研究』・十二・一・二、一九四七年)なる論攷に對しつ方法論上の批判を行なつた(B. Karlgren; Legend and Culls in Ancient China, 書評『民族學研究』・十二・一、一九四八年)ことに起因する。岩村氏は「古代研究に於て時代的に異なる資料を混

合して使用すると云う無批判な方法」が行なわれがちである風潮を指彈し、「民族學者や歴史家が、古代に關する或るテーマの考證に、先秦から宋代に至る諸種の資料を混合して使用することは許されるべきか否か」との問いかけを發せられたのである。これに對し、石田氏は同誌十三卷四號において「近代文明以前の時代における文化の固定停滞性、ならびにそれにもとづく文化發展の跛行的な不均等性という事實」を前提とする限りにおいて「現在のフォークロアの學や、過去にフォークロアを記録した古文書の利用をもふくめた歴史民族學、とくにいわゆる文化史的民族學が、人類文化史復元の學として成り立つ」であらうと言明され、さらに岩村説をば「庶民大衆の生活文化を度外視し、政治的時代區分を直ちに文化史の區畫として想定した古來の東洋史學者の傳統的な先入觀念と、文書資料をその作成された年代と結合してでなければ利用しえない、從來の文献史家のもつ一種の Zeitfurcht (時間への危懼) に支配されて」いるものであると反駁された(「文化史的民族學成立の基本問題」)。氏はまた該論文上において「民族學が先史學その他の姉妹諸科學と提携協力すれば、書かれざる人類文化史の復元に寄與しうることを信ずるものであり、かかる歴史民族學の成立の可能性を否定せんとする意見にたいしては、あくまで抗爭する用意をもつ」と、その旗幟を鮮明にされたのである。かくして、この論争は一應終熄したのであるが、岩村氏は最近發表された巨冊『モンゴル社會經濟史の研究』(京都大學人文科學研究所、一九六八年)の中で、再びこの問題に簡單に觸れられ、「歴史家が異時代資料の利用に細心であるのは、獨立の學問としての史家の處置である。人類學者がこれに對して歴史家の Zeitanst と評するのは當らないと思う」(二七頁の註)

と慎重を期す限りにおいて異時代資料を取扱うことは可であるとの、該問題に對して若干柔軟な態度を示されるに至ったのであるが、石田氏のこれに對する文化人類學の立場からの見解を聴くことが不可能となった（岩村氏の該著が發刊される直前の一九六八年十一月、石田氏が逝去されたからである）ことは、惜しむべきことであったといえよう。以上、兩氏の有益なる論争により確認しうる共通の立場は、「文化變容の存在が明かである時」（岩村説）以外の場合であれば、換言すれば「文化の固執性」（石田説）が認められる場合であり、それを前提とするならば、細心の扱いによる批判的な異時代資料の文化史への活用は許されるべき性質のものであるということになるであらう。

また最近における特に注目すべきものとしては、現代モンゴル史——殊に革命時期——における「文盲の」牧民バルチザンの口述による最も vivid な記録の尊重を主張された田中克彦氏の見解がある。従来のモンゴル人民革命の記録としては、外からの、諸大國による「我田引水」的なものが支配的であり、當然そこでは革命の主体となつて苦惱した牧民の意識なり動きなりが輕視されがちであり、それが意識するとしないうちに拘らず、モンゴルの「牧民革命」乃至はモンゴル人民共和國そのものの地位さえも眞の獨立とは離れたものとして理解させる大きな原因の一つとなつていたことは否むべくもない。それ故、田中氏のこの問題提起は、モンゴル現代史研究上新たな展望を拓いたものとして受けとめられねばならないし、それがまた、モンゴルの「牧民革命」という類例のない事業の足どりを明らかにする上において、是非とも必要な手續きであることを認めるならばなおさらそうである。

ところで、近年特に顯著になつてきた傾向として、北アジア遊牧民（更にはシベリア諸民族をも含め）についての傳承文化 folklore の精力的かつ體系的な採録整理ということが指摘されるであらう。いうまでもなく民間傳承は、その母胎たる社會の最も基本的な動きと不可分の密接な關係を有しつつ、長い傳統と共に保持されてきたものであるから、當該社會の基層部分の諸局面を考察する爲には、前述の論争の同意點をふまえてみれば、研究過程においてある程度有効な作用を及ぼすであらうことは想像に難くない。

このような思想を端的に示しているものの一例は、その地域に關する最大の國際學界である P. I. A. C. (Permanent International Altaic Conference, 國際アルタイ學會) の過去何回かの成果にも見受けられる。同學會は會毎に討議さるべき特定の課題を設定している——そしてそのことは、とかく散漫になりがちな國際學會の學術的成果面でのマイナス面を減少させ、効率的な論議を行なうことに與つて力があるものと考えられる——が、その topic の幾つかを一見すると、たとえば一九六二年「アメリカ合衆國の Bloomington で開催された第五回のそれは」(The Dwelling of the Altaic Peoples, ①) Forms of Cultural and Musical Expression among the Altaic Peoples, ② The Diffusion of Writing in the Altaic World, ③ Dress and Ornament in the Altaic World, ④ 四種であつたし、一九六四年にオランダの Oosterbeek で開かれた第七回のそれは、The Horse in Ancient Altaic Civilization であり、一九六五年、西ドイツのボン近郊の Schloß Auel で開かれた第八回大會のテーマは、The Hunt in Altaic Civilization, であつたことからも窺えるように、topic 設定の際の關心が該社會の基層部分

に向けられている事、そして文化史的な立場にあることが納得されよう。そして實際にそこで發表された研究の多くのものが、歴史學と周邊諸科學との効果的な連携にもついた方法論の上に生れたものであり、その方法のある程度の一般性をも示しているといえる。

さて、多數の北アジアの民間傳承採録活動のうちで最も高い評價を與えられて然るべきものは、リンチェン B. Phipps 博士の行なつたそれであろう。ドイツで刊行されている *Asiatische Forschungen* 叢書には、“Folklore Mongol”<sup>⑧</sup> と、“Les matériaux pour l'étude du chamanisme mongol”<sup>⑨</sup> の二種がある。前者は、現在までに四冊が刊行されており、第五冊の發刊も間もないことと豫告されている。同書は、四冊分で既に千頁を越える巨編であるが、その内容も極めて意義深いものである。quérir<sup>⑩</sup> とよばれる胡弓様の民族樂器を奏しながら、吟遊詩人によって吟じられるあらゆる種類の口誦文學の集大成ともいふべきものであつて、そのジャンルも民話・英雄敘事詩・歌謠・小話・傳説・奇談・諺・謎かけ・祝い言葉等々多岐にわたり、漏らすところがない。同シリーズの完結が實現すれば、その民俗學的資料としての價值ははかり知れないほど大きいものであり、これによってモンゴル遊牧社會の「ステップの句に満たされた」生活の様相と、其處に生きた人々の最も日常的な實感を直接的に知ることが可能となるであろうことは疑いない（信頼すべき情報によると、最近 A. F. 叢書においてこのシリーズの譯出が考慮されているとのことである。もしそれが實現すれば、この資料の意義は更に高いものとならう）。また後者は、全三冊よりなり、シヤマンの祈願の際の言葉を採集したものである。これまでに、シヤマンの呪文を收録した研究はあつたが、何れも部分的なものとい

わざるをえず、その意味からもこのような體系的な資料集が得られた事は喜ばしい。同書第一冊は、古文書に残されたシヤマンの言葉を檢出し、ローマナイズしたものの六八篇が收録され、第二冊は、北および南ブリヤートにおいて行なわれていた口碑を採録したものである（北ブリヤート分——三八篇、南ブリヤート分——一八篇よりなる）。それには、家・火・爐・新婚夫婦・狩獵の神・各種の精靈等々に對するシヤマンの祈願の言葉の多數の實例が見られ、その多岐にわたる祈りの對象を見渡すと、モンゴル遊牧民社會において果實したシヤマンの役割の廣さと思わずにはいられない。ところで、幅廣いリンチェンの活動の内でも忘れられてはならないのが、ウラールンバートルにおいて刊行されてゐる *STUDIA FOLCLORICA* 叢書における指導的な役割である。同叢書は、いうまでもなく、「自國の文化」としてのフォークロアを採集する目的で行なわれているものと考えられるから、最も注目すべきものでなければならぬ。なお筆者が目ざしえた限りでは、同叢書は、その内容の價值の高さにも拘らず、ロシア語に譯出されたものがあるかと思えば、口碑をローマ字轉寫したもの、更には現代モンゴル語で書かれたものもあるという具合で、資料としての技術的统一がとれているとはいえない。また外見的にも、判形・裝幀がまちまちであることなどから、入手の際の漏れが生じ易いと思われるので、全巻揃えて備える圖書館を幾つか確保しておくことが必要であらう。

この他、近年の看過すべからざる民俗學的資料としては、ポッペがハルハ・モンゴルで採録した、民話・英雄敘事詩・傳承・シヤマンの言葉などをローマ字轉寫し、ドイツ語譯を添えたもの（*Nikolaus Poppe: Mongolische Volksdichtung*, Wiesbaden, 1955.）があり、

など G. Kara; Chants d'un barde mongol, (Akademai Kiado, Bibliotheca Orientalis Hungarica XII), Budapest, 1970. ⑧には、著者が一九五九年に中華人民共和國を訪れた時、内蒙古自治區の Koukoukhoto (呼和浩特) に住む Jarut 族の吟遊詩人 Pajai qur-urci の詠するところの叙事詩・抒情詩を採録したものが收められている。その内容の構成は、二十九篇のテキストとそのフランス語譯のほか、モンゴルの吟遊詩人像を描き出し、更には收録作品についての詳細な注釋や該地の方言に關する言語學上の研究などがあり、そして殊に重要なのは五十餘ページにも及ぶ緻密な Glossaire である。Kara と同様ハンガリーの民族學者たるロナ・タジがモンゴル東南部のダリガンガ地方で、同地の方言によるフォークローアを採集したものが (A. Róna-Tas; Dariganga Folklore Texts, Acta Orientalia, X-2, 1960.) があり、青海 (グク・ノール) 地方のモング・オール族についてシェレイダーの採集したフォークローアの記録がある (Dominik Schröder; Aus der Volksdichtung der Monguor, I, —A. F. Bd. 6— Wiesbaden, 1959.)。同書は、詳細な解説と共に該地域の方言による神話・民話・歌謡がローマナイズされ、ドイツ語譯が附されている。そしてなお注目に値する業績として、ハイシツヒがヨーロッパ各地の圖書館・博物館などの研究機關 (Antwerpen, Berlin, Göttingen, Kopenhagen, Löwen, Marburg, Oslo, Stockholm, Stuttgart, Tübingen の十個所) に現存するモンゴル古文書の中から民俗學的關心にもとづいて行なった抽出作業がある (Walter Heissig; Mongolische volkreliöse und folkloristische Texte aus europäischen Bibliotheken, mit einer Einleitung und Glossar, Wiesbaden, 1966.)。同書は、十項目

①永遠の蒼天への崇拜 ②火の崇拜 ③白い老人 Jaran ebügen 崇拜 ④ゲセル・ハン崇拜 ⑤チンギス・ハン崇拜 ⑥山嶽崇拜 ⑦騎士の神への崇拜 ⑧シャマンの「年代記」 ⑨婚禮の風習 ⑩年中行事」にわたる諸種の民間信仰について、解説および七十七篇からなるローマ字轉寫されたテキストが收められている。この著作は、ハイシツヒの廣汎かつ精緻な各種カテゴリー作成をはじめとする、モンゴル學に對する地味なしかし最高度に貴重な貢獻の内でも特筆すべきものといえるであらう。

さて斯様に、着實に質・量ともに豊富になつて行くモンゴル民族の民俗學的資料の活用を圓滑にするために、とりあえずなされるべき作業の一つは、Motiv 毎の分類および整理ということではなからうか。我々はチュルク民族のそれについては、既に W. Eberhard と P. N. Boratav との共著になるすぐれた實例をもちえているが、モンゴルの場についても同様のものを作成して、周辺の諸民族のそれとの比較研究を行なえば、彼此の文化的な接觸融合の深度を考察する際に大なる便宜を與えることであらう。

しかし、今最も切實に要求されていることは、今日まで何とか保持されてきたフォークローアの組織的かつ良心的な集成——Ureks の忠實なローマ字轉寫は、何をおいても先ず行なわれるべき仕事でなければならぬ——であり、それと今述べた研究上の參考書等の作成とが、緊密な連絡のもとに行なわれることである。

最後に、目を我國におけるこの種の研究へと轉ずると、何といつても佐口透氏を中心とする北アジア民族研究會の刊行した「北アジア民族學論集」をあげねばならない。同書は既に第六號まで發行されており、注目すべき外國の論文を譯出したものも多數含まれてい

るが、ここでは田中克彦氏が譯出され、同書四、六號に分載されたバダムハタンの「フブスグル地方トナカイ遊牧民の生活實態のあらまし」(C. Бадамхатан; Хөвсгөлийн цаатан ардын аж байдлын тойм, Улаанбаатар, 1962.) に収められた。同論文はモンゴル人の民族學者が、遊牧民——草の民としての——ではなく、タイガの民の全生活體系——即ち經濟・行政・社會、物質文化および精神文化——の實態を仔細に觀察したものであるところに大きなメリットがあろう。また、モンゴル民族學のカヴァーしうる範圍の廣さを直接に知る得るのである。

その他、同誌には民族學と周邊諸科學との關係についてのソ連邦における論争なども収められており、極めて有用である。以前は、『民族學研究』などに散發的に發表されていたこの種論文を、統一的に収めることのできる場の確保は切實な問題であるから、同誌の何らかの形で續刊が心から待たれるのである。

# 註

① たとえばソ連邦における北ユーラシア全域にわたる遊牧民族史研究の著しい先進性は、ソ連邦考古學者の手になる多くの劃期的な發見發掘の實績なしに説明できない。

② 遊牧社會に對する社會人類學的考察は、特にアメリカ合衆國において異色ある多くの業績を産出してゐる。たとえば、D. Abertle: The Kinship System of the Kalmuk Mongols, Albuquerque, 1953. H. Vreeland: Mongol Community and Kinship Structure, New Haven, 1953. E. Bacon: Obok, a Study of Social Structure in Eurasia, New York, 1958. L. Krader: Social Organization of the Mongol-Turkic Pastoral Nomads,

— Indiana University Publications, Uralic & Altaic Series, Vol. 20—1963. P. Rubel: The Kalmuk Mongols, a Study in Continuity and Change, — Indiana University Publications, Uralic & Altaic Series, Vol. 64—1967. などがある。

③ ソ連邦民族學の重鎮、トカコフ C. A. Tokaev の「ロシア民族學の時代區分」なる論文を紹介された吉成大志によれば、一九四八年以降ソ連邦民族學界においては、このような考えが主流をなしているというのである(『遊牧民族の研究——自然と文化・別編II——』一九五五年)が、ソコロフの論文もその土壤に根ざしていることが理解できよう。

④ 岩村氏のこの問題に解する姿勢は、近著『東洋史の散歩』(新潮社、一九七〇年)の「歴史への反省」に見られる。

⑤ 「モンゴル現代史とその史料」(『東洋學報』五二—三、一九六九年)、「現代モンゴル文學の原像と人間像」(『文學』三九—六、一九七二)など。

⑥ 同大會の模様については、服部四郎氏(『民族學研究』二六—四)、村山七郎氏(『順天堂大學體育學部紀要』第五號)が夫々報告をよせられている。なおその時なされた研究發表は、『Aspects of Altaic Civilization. Proceedings of the Vth Meeting of the P. I. A. C. held at Indiana University, June 4—9, 1962. Edited by D. Sinor—Indiana University Publications, Uralic & Altaic Series, Vol. 23—1963』に収められている(同書への書誌は、Central Asiatic Journal (C. A. J. の略稱)のIX—2、J. Edward Tryjarski による)。

⑦ 田中克彦氏(『民族學研究』三〇—二)と、岡田英次氏(『東洋學



